

富岡の記憶と足跡

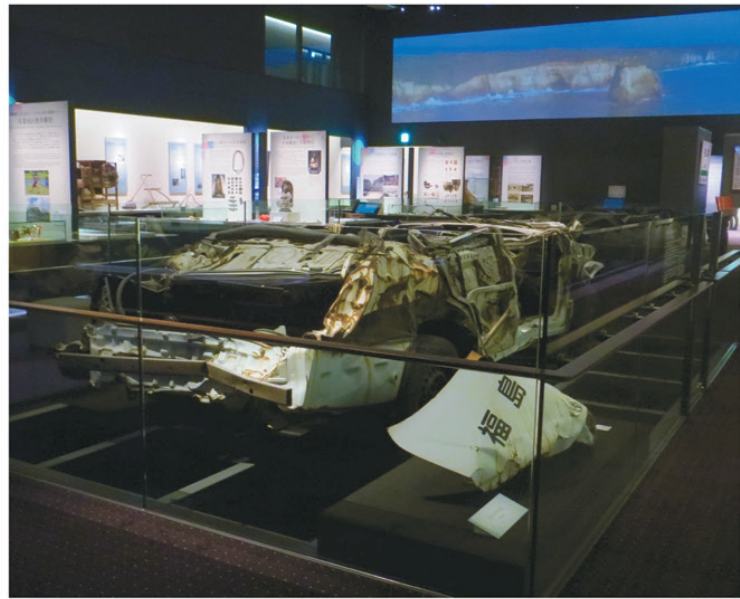
「資料の寿命は無限」

ふるさとへの想い 未来へ紡ぐ

とみおかアーカイブ・ミュージアム

東日本大震災から14年。福島県富岡町にある「とみおかアーカイブ・ミュージアム」は、震災前の人々の暮らしやまちの姿、そして地域の運命を大きく変えた出来事を大切に記録し、未来へつないでいくための展示やワークショップが行われている。富岡町の歴史、そして幾多の試練を乗り越えて育まれてきた人と人の深いつながり。訪れる人の胸に静かに、時に強く響き渡る。復興への歩みを重ねていくなかで生まれる、心のゆとりと富岡町の人々を結びつける大きな絆。私たちは取材や体験を通して「この町の復興」が富岡町の人々の間に確かに広がり、将来への希望となっていることを肌で感じる事ができた。

(赤石沢弥子)



津波の被害を受けたパトカー

心揺さぶる震災遺産

とみおかアーカイブ・ミュージアムは震災の「伝承館」ではなく、旧石器時代からの富岡を伝える「歴史館」だ。副館長の三瓶秀文さんと学芸員の吉野高光さん、蘭田春音さんが語った。

3人は「私たちの寿命は有限ですが、物や資料の寿命は無限です。だから、富岡の歴史を資料のパワーで未来に紡いでいきたい」と言葉に力を込めた。



インタビューを受ける(左から)三瓶さん、吉野さん、蘭田さん

ジャーナリスト
スクール
2025年第5班

町が運営する施設であり「文化的なことをしよう」ということで始めた。ずっと継続していきたい」と願っていた。

(三原千宙)

海水から塩作り

安全を再確認

塩作りを体験した。富岡町では塩作りの跡を示す千年以上の出土品がある。江戸時代には税金として納めていたこともあるという。町の歴史を伝えるためにワークショップに採り入れている。



海水から塩作りを体験するワークショップ

を入れ、2〜3時間煮詰める。塩の結晶をフライパンに移して水分を飛ばす。焦げないように手早くやるのがポイントだという。この時、硫黄の匂いがした。完成した塩は粉砂糖のようにサラサラしていた。甘みがあり、とても美味しかった。

(富山愛彩)

私たちが作りました

- | | |
|-------|-------------|
| 富山 愛彩 | (福島一小5年) |
| 三原 千宙 | (富田西小6年) |
| 中津川千晴 | (原町二中1年) |
| 石井 陽都 | (富田中2年) |
| 赤石沢弥子 | (桜の聖母学院中3年) |
| 庄條 のり | (会津学鳳高2年) |



編集後記

展示の中に復元された夜ノ森駅と富岡駅がある。当時使われていた時刻表や改札。駅の利用者には私と同じ高校生もいただろう。自分の生活にあるものだからこそ、当たり前の日常を奪うという震災の悲しさを感じ、震える思いで胸がいっぱいになった。もし自分の故郷で富岡のような複合災害が起きたらどうなるのだろうか。今まで自分に置き換えて考えることができていたのだろうか。

(庄條のり)

展示品とともに伝える町民の声

展示の随所に「町民の声」というパネルがある。

施設職員が町民に聞き取り調査し、反映した。町民にとって富岡町がどのようなものだったかが分かる展示となっている。

町民の声

(海岸線は)いわゆる湾のようになっちゃいました。昔、ろうそく岩なんていう、皆さんから愛されるような素晴らしい景色があったんです。

(40代 男性)



展示品に添えられた「町民の声」

私たちの時は時に辛く悲しい歴史を学び、未来に活かさなければいけない。震災の後を生きる福島県民として果たさなければいけない使命である。

(庄條のり)